

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

若手が切磋琢磨する場を作り、  
「今の笑い」を見つめ続ける

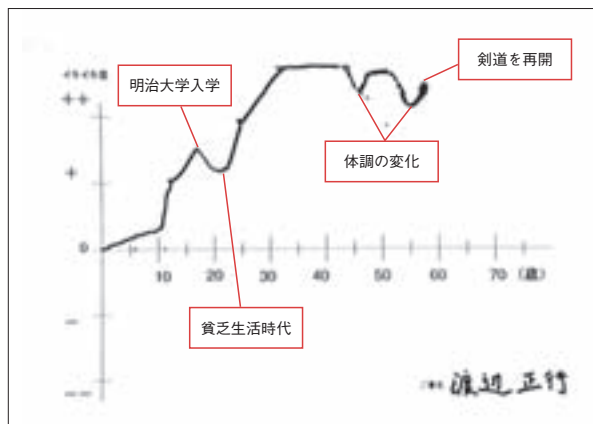
**渡辺正行氏** Watanabe Masayuki

お笑い芸人

## Career History

### 渡辺正行氏の キャリアヒストリー

1956年	0歳	千葉県いすみ市出身。父は「半農半会社員」。末っ子で、兄と姉がいる。中学時代から剣道に打ち込み、関東高校剣道大会にも出場した
1974年	18歳	明治大学経営学部に入学。落語研究会に入り、小宮孝泰氏や三宅裕司氏と出会う
1977年	21歳	小宮氏とともに劇団「テアトル・エコー」の養成所に入り、ラサール石井氏と出会う。小宮氏、石井氏と「コント赤信号」を結成
1978年	22歳	大学卒業。コメディアン・杉兵助氏に弟子入りし、ストリップ劇場の幕間コントに出て修業を積んだ
1980年	24歳	解散を考えていた矢先に渡辺氏が台本を書いたコントが評判となり、人気お笑い番組「花王名人劇場」でテレビデビューを果たす
1986年	30歳	渋谷のライブハウス「ラ・ママ」で所属事務所を超えて参加できる新人コント大会をスタート
1988年	32歳	人気クイズ番組『クイズ世界はSHOW by ショーバイ!!』のサブ司会ぶりが評価され、多くの人気番組に単独でも出演するようになる。個人事務所を設立して独立
1999年	43歳	結婚。翌年に長女が誕生した
2013年	57歳	『さんまのスーパーからくりTV』など数多くのテレビ番組に出演中。主催する「ラ・ママ新人コント大会」は4月で308回目を迎える



直筆の人生グラフ。波はあるが、常にプラス。最も深い谷は大学在学中に劇団に入り、芽が出なかった時代。「とにかく貧乏でした」と渡辺氏。

お笑いトリオ「コント赤信号」のリーダー・渡辺正行氏が、長年にわたって若手お笑い芸人の育成に注力してきたことをご存じだろうか。1986年から主催するお笑いライブ「ラ・ママ新人コント大会」は新人芸人の登竜門とされており、過去の出場者にはウッチャンナンチャン、爆笑問題、バナナマンなどそうそうたる顔ぶれが並ぶ。渡辺氏はなぜお笑いの世界に入り、若手の育成にかかわるようになったのか。その道のりを聞く。

#### ももとは役者志望。

#### 演技の練習のつもりでコントを始めた

「田舎育ちで、高校までは純朴そのもの。クラスではよくいる『ふざけたヤツ』でした。背が高く、成績もそこそこだったので目立ってはいましたね。モテたかどうかですか？（笑） のどかな時代ですから、女の子とつき合うようなことはなかったです。中学から始めた剣道に打ち込み、厳しい練習に耐える毎日でした」

その反動から「大学では楽しみたい」と落語研究会に入った。同会には先輩の三宅裕司氏、立川志の輔氏、同期の小宮孝泰氏など、後にお笑い界で活躍する顔ぶれがそろっていた。

「世の中にはこんなに面白い人たちがいるんだとカルチャーショックを受けました。とくに志の輔さんが大好きで、彼のようになれたらとくっついて歩いていました。ただ、身近に落語のうまい人たちがたくさんいましたから、落語で勝負しようとは思えなかったです」

演劇にも興味を持つようになり、大学3年生のときに劇団「テアトル・エコー」の養成所に入所。小宮氏とここで出会ったラサール石井氏とともに「コント赤信号」を結成した。

「コントは軽い気持ちで始めました。芝居をやるには場所もお金も必要だけど、コントなら学園祭など出演の場が多く、演技の練習にもなるんじゃないかと思って」

お笑いの世界でプロになろうと決めたのは、大学卒業の年の秋。コント活動で知り合った芸人さんから、「コメディアンに杉兵助氏に弟子入りしてストリップ劇場の幕間に芸をやらないか」と誘われ、劇団を辞めた。

「役者を目指してレッスンに打ち込んだけれど仕事はなく、このまま劇団でくすぶるよりはお笑いのほうが向いているかもしれないと考えたんです。師匠についてストリップの幕間に1日4回コントをやり、あとは師匠の身

の回りの世話や劇場の掃除などが仕事。年中無休で、月収は7万5千円と薄給でした」

### 大事なのは決断すること。 迷っていると勢いが落ちる

当時は若手芸人がお笑いをやる場がほとんどなく、最初は「コント赤信号」として舞台に立てるだけでありがたかった。だが、ストリップ目当てのお客さんを笑わせるのは簡単なことではない。気持ちが萎え、師匠が書いたコントを情性で演じる日々が続いた。新しいネタも生まれず、解散が決まりかけていたとき、かつて同じストリップ劇場に出演していた「ゆーとぴあ」の人気が出て、彼らが主催するコント大会に出ることになった。

「解散前の1本だけのつもりで僕が書いたのが、後に看板ネタになった暴走族コントの原型です。コント大会での評判もよく、弾みがついてストリップ劇場でも僕たちの出番でお客さんが沸くようになりました」

この波に乗り、お笑い界で生き残りたい。そのためには3人の力を結集しなければと、渡辺氏は自らがトリオのリーダーとなることを石井氏と小宮氏に宣言した。

「危機感を共有していたので、2人から反論はありませんでした。

トリオ結成以来、何事も話し合いで決めてきましたが、それでは時間がかかり過ぎる。AとBがあってどちらが面白いかなんてさほど変わりません。大事なのは決めること。迷っていると勢いが落ちるんです」

台本も渡辺氏が担当した。台本を書くにあたっては、時代感覚を養うために時間を見つけては評判の公演に足を運び、お笑い番組も片っ端から観たという。

「お客さんが笑ったギャグを全部メモして、なぜウケたのかを分析するんですよ。内容なのか、間なのか、言い方なのかってね。それを繰り返して今の笑いをつかみ、一方で自分たちの力量を分析する。その上で、ほかの芸人さんがやっていなくて、自分たちにできる要素は何かと考えて、ネタに盛り込んでいきました」

それまでは崩れていた生活リズムも立て直し、石井氏、小宮氏と毎朝10時に集合してマラソン。書き上げたコ

ントを練習しては3人でネタを練る日々を続けた。真剣にお笑いに取り組むようになると、目をかけてくれる人も増えた。24歳のときに杉兵助氏の口添えで人気お笑い番組『花王名人劇場』に出演したのをきっかけにテレビにも進出。大ヒット番組『オレたちひょうきん族』にレギュラー出演し、ビジュアルやキャラクター設定にインパクトを与えた「暴走族」コントで一世を風靡した。

### 若手育成を通じて刺激を受け 芸人として新陳代謝を続ける

その後、渡辺氏はバラエティ番組のサブ司会やドラマ出演でも活躍するようになり、1980年代半ばには単独での活動に比重が移っていく。「ラ・ママ新人コント大会」を立ち上げたのはそのころだ。

「僕たちのデビュー当時は、若いお客さんにネタを見てもらう場がほとんどなかった。だから、“今”の感覚を知るために『コント赤信号』の新ネタライブをやっていたんです。そのうちに、若手から『笑いを勉強したい』と相談されるようになったんだけど、笑いなんて勉強するものじゃないでしょ。『お客さんの前で力を試すのがいちばんいいからライブに出てみれば?』ということで、場を提供するよう

になったのがそもその始まりなんです」

以来20年以上にわたり、月1回のペースで「ラ・ママ新人コント大会」を開催してきた。所属事務所を超えて参加できるお笑いライブはほかになく、多くの若手がこのライブのトリを目指して切磋琢磨し、スター芸人として成長していった。

「このライブを続けているのは、笑いが好きだから。芸人がネタをやるときに爆発的にウケるといのはそんなにはなくて、たいていは80%くらいなんです。でも、若手が成長する過程を見続けていると、120%ではじけるときがたまにある。その瞬間を目の当たりにすると、自分のことのようにうれしいし、感動してゾクッとします。同時に僕も、今の笑いというのはこういう感覚なんだというのをつかんで、次に行ける。若手育成というよりエネルギーをもらっている感じですね」



## 修業の「場」をマネジメントする 若手芸人育成のリーダー

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

渡辺氏には、戦略家としての顔とマーケッターとしての顔がある。落語から芝居、そしてお笑いへとキャリアを展開していく過程は「どうしたら勝てるか」を考えた結果の選択であった。リーダーというコント上の役柄をそのまま自身のキャラクターにしたところや、司会業におけるポジショニングなど、戦略的に考えた結果だろう。そして客が何に反応して笑うのかを情報収集し、冷静な目で分析するところはまさしくマーケッターである。笑う理由を分析するためにメモをとり続けたというが、その分析はメモこそとらないが今でも続いているに違いない。

その渡辺氏が、次世代の若手のために自ら仕立てた場が「ラ・ママ新人コント大会」だ。自身も若手のときに芸を披露できる「場」がないことを課題に感じていたからこそ、収益性度外視で立ち上げた。1986年に始めて、現在も続く大会はすでに300回を超え、その場を成長の機会として活かし、ブレイクした芸人が今のお笑い界の中核を占めている。

私も先日、渋谷のライブハウス「ラ・ママ」で行われている大会を見に行った。観客のうち10人が<sup>バツ</sup>×の札を上げると芸の途中でも強制終了となる厳しい修業の場だ。そこにいる渡辺氏は、芸人と客席の真ん中に立っている。「若手にアドバイスするときは一步引いたところのように心がけています」（渡辺氏）と言うが、それは観客目線でどうしたらもっと面白くなるかを投げかけるということなのだろう。戦略家・

マーケッターならではのアドバイスの仕方だ。

たとえば、オードリーがブレイクする前に「っこみがきつくて客席が引いてるよ」とアドバイスしたところ、彼らが考えて“そんなに俺のこと嫌いか”“嫌いだったら一緒に漫才やってねえよ”というやり取りを入れてきて、客席の笑いが一気に増えたという。そのようなちょっとした渡辺氏のアドバイスが、ブレイクのきっかけを作っているのだ。

お笑いは日々進化していると感じる。もうこれ以上新しいパターンは生まれてこないかと思っても、すぐに新しい形が出てくる。渡辺氏は、そのような進化を陰で支えている「リーダー」なのである。

### 渡辺氏による若手芸人育成のフレーム

